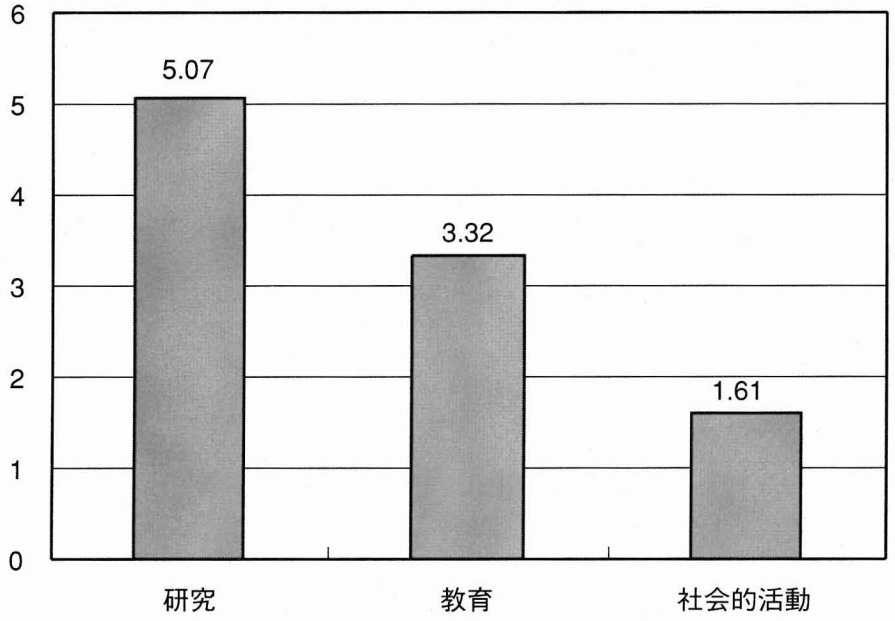
第１部　調査の統計データ

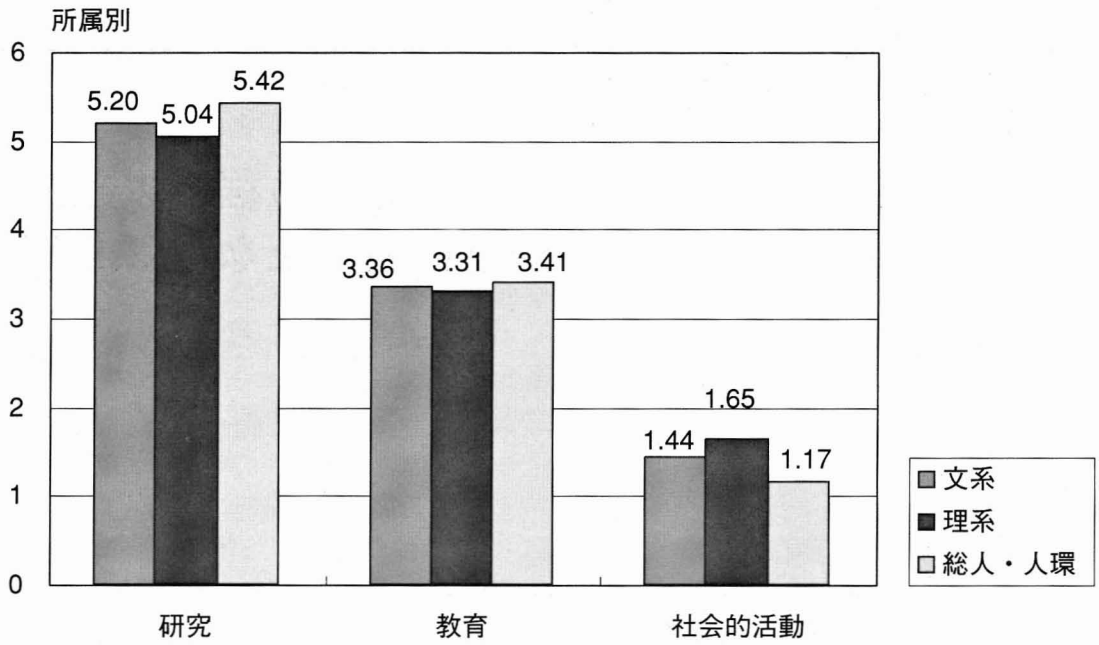
(1) 教育への関心について

① 研究、教育、社会的活動の比重

研究５割、教育３割、社会的活動２割



大学教官の主要な仕事を「研究」「教育」「社会的活動」の３つに敢えて振り分けた場合の比重を聞いたところ研究が約５割、教育３割、社会的活動２割となった。この質問については、医学研究科等の先生から医療活動の位置付けの仕方（社会的活動ではあるが、研究でもあり、教育でもあるので分類が難しい）に関してご指摘をいただいた。



教官の所属を３つに分類（文系、理系、総人・人環）して見てみると、理系と総人・人環が顕著な違いを示している。相対的に、理系が「社会的活動」を重視している（1.65）のにたいし、総人・人環は「研究」（5.42）を重視している。文系は両者の中間的傾向を示す。ただしこれを仕事の実際的な優先度とみなすか、あるいは理念的な重要度とみなすかは、解釈の余地がある。

所属部局の分類については以下のとおり（回答者のいる部局のみ）。

「文系」：文学研究科、教育学研究科、法学研究科、経済学研究科、人文科学研究所、経済学研究所。

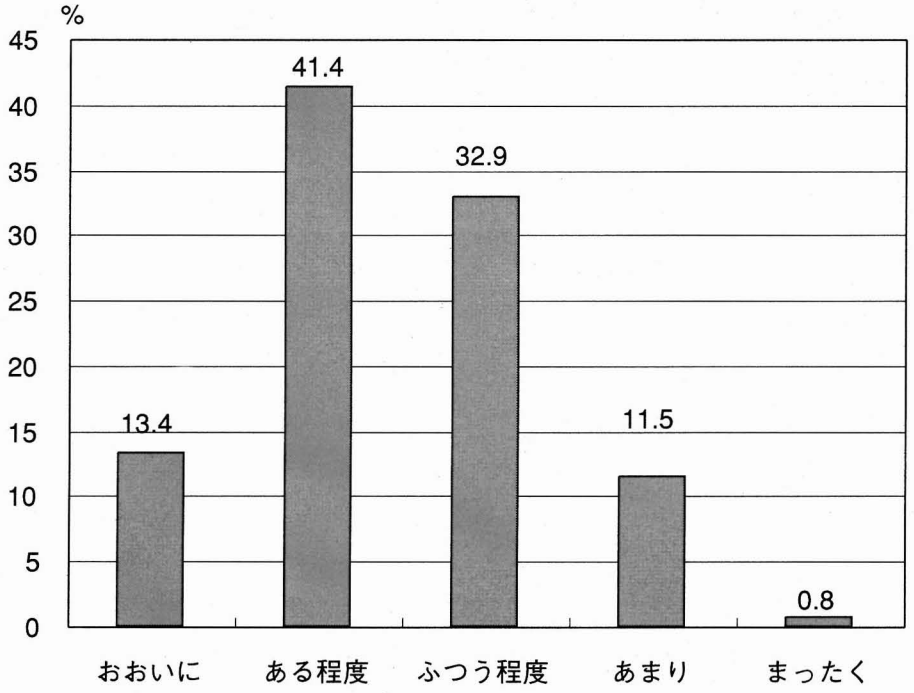
「理系」：理学研究科、医学研究科、附属病院、薬学研究科、工学研究科、農学研究科、エネルギー科学研究科、化学研究所、再生医科学研究所、エネルギー理工学研究所、木質科学研究所、食糧科学研究所、防災研究所、基礎物理学研究所、ウイルス研究所、数理解析研究所、原子炉実験所、霊長類研究所、大型計算機センター、放射性同位元素総合センター、放射線生物研究センター、超高層電波研究センター、生態学研究センター、総合情報メディアセンター、情報学研究科。

「総人・人環」：総合人間学部、人間・環境学研究科。

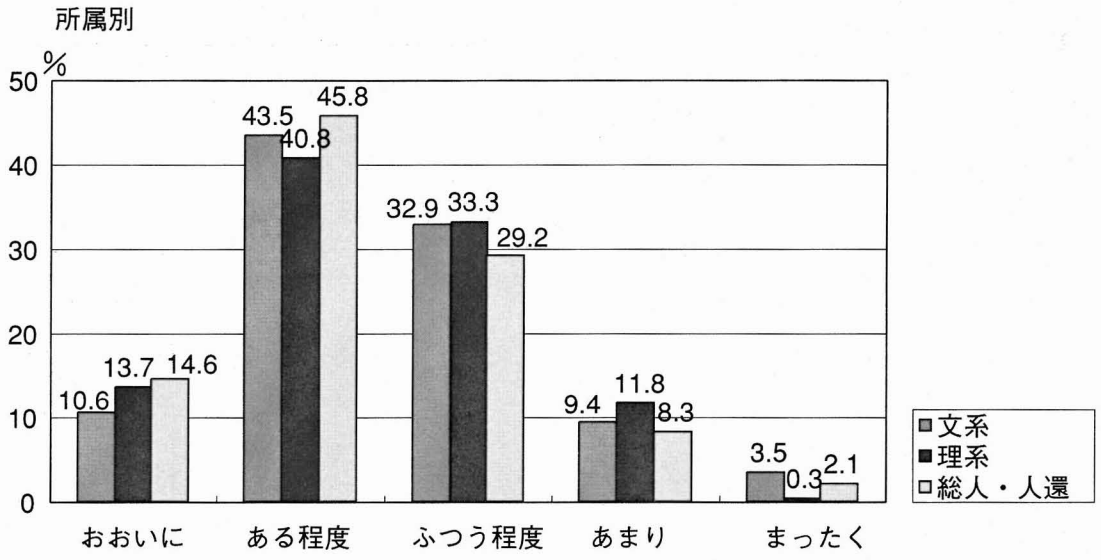
なお、次の部局については分類が困難なため所属別データからは除いた。東南アジア研究センター、体育指導センター、留学生センター、総合博物館。

② 教授法の工夫

教授法の工夫に時間・エネルギーをある程度以上充てている教官は半数を越え、普通程度以上ならば９割。



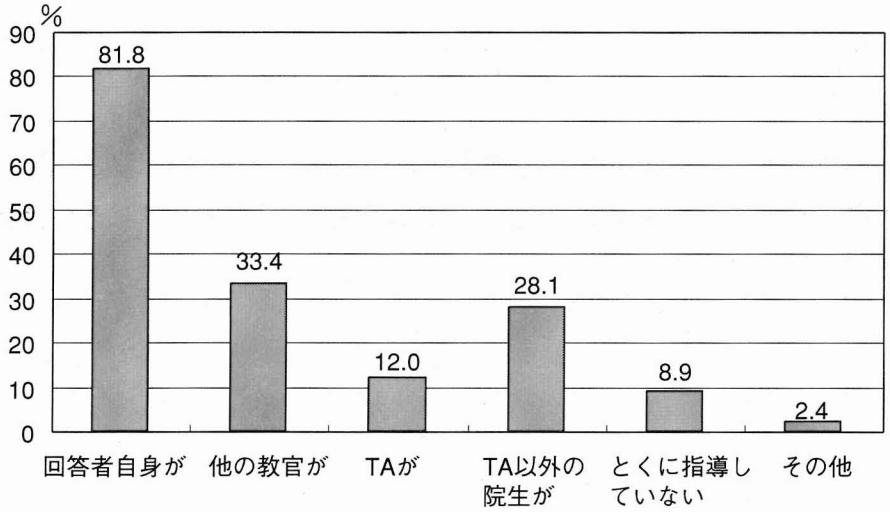
教授法の工夫にどの程度の時間やエネルギーを充てているか、を聞いたところ、ある程度以上充てているとされた教官が54.8%、普通程度充てていると応えた教官を含めると87.7%の教官が教授法の工夫に取り組んでいる。京大の教官は教育に熱心ではない、というのは的を射た指摘とは言えないようである。



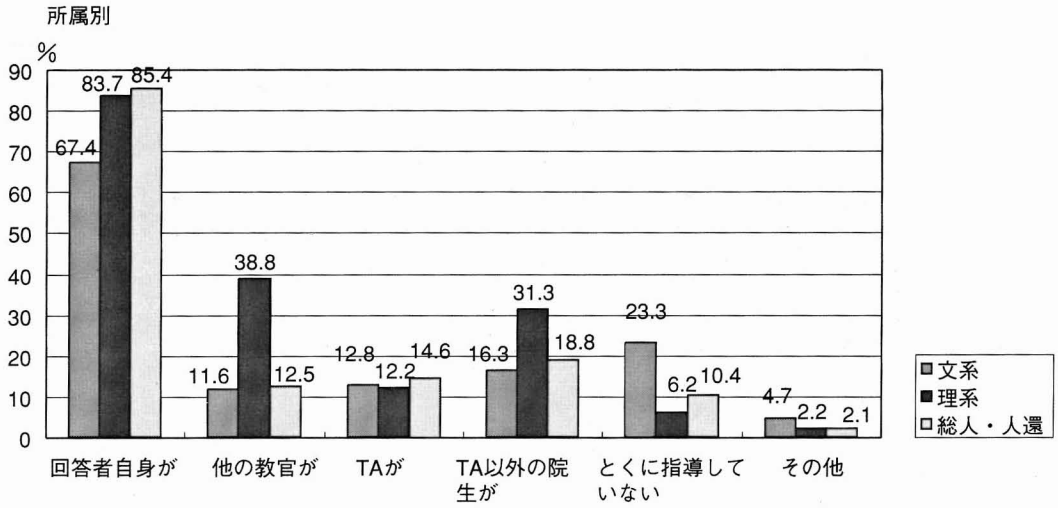
「ある程度」以上充てているとの積極的回答は、文系（54.1%）理系（54.5%）にくらべ、総人・人環（60.4%）に多い。ただし「ふつう程度」も含めるとその差は消えてしまう（87.0%、87.8%、89.6%）。

③　だれが学生に基礎的指導をするのか

教官自身がしているのが８割



文献検索、調査、実験などの基礎となる技術を誰が指導しているか聞いたところ、自身がされているのが81.8%であった。大学院重点化の進行に伴う助手定員の振り分け、ＴＡ制度の普及が十分ではないこと等により、基礎技術指導を自らせざるを得ない現状が窺える。もちろん、これには右頁のとおり、所属による違いがある。



文系では、「回答者自身」(67.4%) が少なく「とくに指導していない」(23.3%) が多い。理系では、「回答者自身」(83.7%) だけでなく「他の教官」(38.8%)「ＴＡ以外の院生」(31.3%) など総出で指導している。文字どおり「回答者自身」が指導する傾向にあるのは、総人・人環 (85.4%) である。